TENSIRA

SAT. JULY 30 2016 ~

フィンランド人の Tuulia Makinen とギニア生まれでフィンランド国籍の Hamidou Diallo により設立されたファブリックブランド、TENSIRA（テンシラ）。全てコットン 100%、手織り、手染めによるもので、自社のワークショップを西アフリカに持ち、地元の人々に安心安全に働いてもらえるよう労働環境も整えられています。ブランドを代表する "KAS fabrics" と呼ばれるチェックやストライプはギニア男性の伝統的な民族衣装に用いられてきました。設立者の一人である Tuulia はアフリカを初めて旅した際、ファブリックの美しさ、デザイン性にすぐさま魅了されたと言います。この優れた技術や伝統を衰退させることなく世代を超えて継承していくため、パリを拠点に世界へと発信しています。Tuulia のルーツである北欧テイストも取り入れられたデザインで、手織りの風合いの良さと程よく洗練された佇まいのバランスが魅力です。

［doinel 別注］別注で使いやすいサイズのトートバッグとポーチを製作しました。白黒のファブリックも別注で織っていただいたものです。

doinel journal

May, 2016

Take Free

doinel standard

doinel original “Carta Varese Stationery Holder”

フィレンツェのファインペーパー “Carta Varese”（カルタヴァレーゼ）は 17 世紀ごろに登場し、そのルーツはルネッサンスのオリジナルパターンにまで遡ります。当時の製法は、テンペラや澱粉などを混ぜた液を木のブロックに塗り、何度も紙に押し当ててプリントしていく非常に手間のかかるものでした。プリント技術の発展により 19 世紀後半からは生産量も増え、現在ではイタリア以外の国でも広くその名を知られています。Carta Varese を使用し doinel オリジナルでステーショナリーホルダーを作りました。紙素材ながら、芯に厚手の紙を使用することにより強度を高め、安定感のあるホルダーに仕上げました。シンプルな長方形は使いやすく、デスク周りに丁度いいサイズ感です。柄が美しいので、並べて使うのもおすすめ。メガネスタンドやペーパーナプキンホルダーなど多目的に使えるのも魅力です。

vetements et accessoires

EMILIE MARC ATELIER

日本で初めてのご紹介となる、パリの EMILIE MARC ATELIER（エミリー マルク アトリエ）の木製プロダクト。身に着けるアートとしてブレスレットを作り、木箱を絵画に変える。ファインアートと装飾デザインが交わる地点における独自の美的アプローチが特徴です。パフォーマンスアートや舞台芸術など様々な活動を経て、現在のもの作りに至ったエミリー マルク。ミニマルなフォルムの奥に陰影のある情景を感じさせるプロダクトは、彼女ならではのものです。ナチュラルな木材の表情と、柔らかさの中にエッジの効いた色の取り合わせが印象的なブレスレット。古い絵画の一部のような重々しい空が描かれた木箱。実用的なアイテムでありながら、日常の風景に変化をもたらす軽やかなアートピースです。

new arrival

FOX UMBRELLAS “Telescopic Umbrellas Whanghee Crook Handle” doinel exclusive color: olive grey, blue grey

1868年にトーマス・フォックスによりロンドンに創業。世界初のスティールフレームの導入により量産が可能になり、改良により、より軽く、細く生まれ変わったモダンな傘は、ステッキの代わりに英国紳士のアクセサリーとして人気に。1947年、空軍のパラシュートの残材であるナイロンを用いて世界初の化学繊維の傘を開発。現在もロンドン郊外クロイドンの本社工場では、創業以来のハンドメイドの伝統を守り生産されています。今年は新たなdoinel別注カラーとしてオリーブグレーを製作。グレーともベージュとも異なる、柔らかさと落ち着きのある微妙な色合いが魅力です。昨年好評をいただき完売していた、同じく別注カラーのブルーグレーも再度入荷。ともに程よい軽やかさがあり、ユニセックスで使いやすいカラーです。ネイビーとブラックも取り扱い中。(共にメーカー定番色)

look at

Laurence Brabant & Alain Villechange

中身により変化する色、使用目的により形作られるボリューム、使うことにより輝く存在感。透明なガラスの特性を生かした、詩的かつ機能的なガラスプロダクトを生み出す Laurence Brabant & Alain Villechange。フランス、イル ド フランス地方のギュシー ル シャテルに工房を構え活動しています。パイレックス（ホウケイ酸ガラス）を用いてフレームワークで作られる独特のフォルムは、こどもの頃の好奇心を呼び起こすような、どこか実験道具を想起させる雰囲気。日常の行為に新鮮な感覚を与えてくれるプロダクトです。7/16(土) より展開予定です。

※フレームワーク：バーナーの炎でガラスを熱して柔らかくし、息を吹き込むなどして変形させる技法

info by doinel

Asako Yagi Exhibition 2016

「色合せを楽しむためのガラス」をテーマにした doinel での八木麻子さんの個展。4 度めとなる今年は 2016 年 6 月 11 日 -28 日の開催です。板ガラスを電気炉で融着させる技法「キルンワーク」で、マットな質感や色のニュアンスをコントロールして作られる作品は、ガラスの新たな魅力と可能性を感じさせてくれます。八木さんのガラス作品の特徴であるやわらかで微妙な色と氷砂糖のようなマットな質感に注目しつつ、かわいらしいだけではない、グラフィカルなオブジェとしての側面をクローズアップ。食材との色合わせを楽しむことができるガラスプレートを中心にご紹介します。

My favorite ○△×

My favorite “The landscape of Skogskyrkogården”

旅行好きの父の影響で、小さい頃から幾度と（大人になった今でも）家族旅行に行く我が家。色々な景色を見せてもらって、それは少なからず今の私をつくっている。そんな環境で育ち、私もどこかに行きたくていつもそわそわしている。初めて友人と行った海外は 20 歳の夏の北欧旅行。もともとインテリアや空間デザイン志望で美大に入ったので、よく雑誌や画面で見ていた空間に、実際に身を委ねる幸せを感じていた。その中でもずっと心に残っているのは、スウェーデンはストックホルムの森の墓地。目の前に広がる広大な丘、遺族の心に寄り添う火葬場と礼拝堂。森では、故人が静かに眠っている。お花も生けるのではなく、墓石のそばに慎ましく咲いていた。いままで墓地は、少し湿気があって、緊張感のある印象だったのに、そこは、公園のように爽やかで、とても良い空気が流れていた。あまりの心地よさに離れられないでいると、お婆さんが一人、森の中の墓石の方へふらりと歩いてきて、その前に咲いているお花に水をやっている姿を見かけた。お墓参りのように仰々しくなく、あくまで日常のなかに、故人に会いにいくという行為があるんだな、と静かに感動したのを覚えている。帰国してすぐ初めての展示が控えていて、何を作ろうかと考えたときに、あのお墓のことが頭から離れなくて、私も、日々忘れていく何か、に対する献花のような作品を作りたいと思い、ガラスで花を咲かせた。あれからもう 10 年近く歳月が経っているけれど、今も私はそのモチーフで作品を作り続けている。出会う風景や人や出来事に、気持ちを動かされて日々制作に励んでいる。最近はなかなか足を伸ばせていないけれど、お気に入りの場所を見つけに、また旅に出たい。

✍ 八木 麻子（ガラス作家）

1987 年生まれ、東京都出身。武蔵野美術大学大学院造形研究科デザイン専攻工芸工業デザインコース 2012 年修了。氷菓子のような繊細さと優しい色合わせが絶妙なガラス表現で、在学中から注目を集めてきた。2016 年 6 月 11 日 -28 日、doinel で 4 度めの個展を開催。

doinel

[location]

3-2-9 Kita-Aoyama, Minato-ku, Tokyo 107-0061

It is 3 minutes' walk from Gaienmae Station

of Ginza Line to doinel.

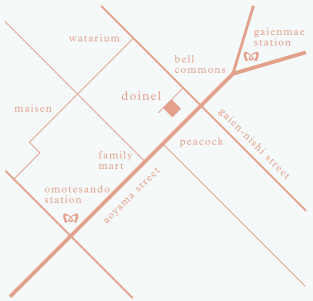
Open 12:00 - 20:00

Closed Wednesday

[contact]

tel +81-(0)3-3470-5007

info@doinel.net

a_doinel

doinel